

- ・番場俊「『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトロヴィチ，あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察」、『現代思想』2010年4月臨時増刊号，286-297頁。
- ・石田美紀「〈歓待の作法〉の失効——タランティーノ映画の変遷と女たち」『ユリイカ』青土社，2009年12月号，82-90頁。

19世紀学研究

研究代表者 松 本 彰

1. プロジェクトメンバー

松本（代表）： 石田，井山，金山，城戸，桑原，鈴木正美，高木，高橋秀樹，錦，逸見，細田，三浦，宮崎裕助

2. プロジェクト概略

人文学部研究プロジェクト「19世紀学研究」は2009年度に新たに立ち上がったプロジェクトであり，学系コア・ステーション Institute for the Study of the 19th Century Scholarship と19世紀学学会と共同で研究活動を行うものである。

3. プロジェクトの成果（平成21年度中に行ったシンポジウム，成果発表等）

本年度は，以下の通り3回のシンポジウム（内1回 国際シンポジウム）と1回の講演会を開催した。

○シンポジウム

- ・「神秘主義と近代」（2009年11月28日）
- ・「近代とミュージアムの成立」（2010年1月9日）
- ・（国際シンポジウム）「ヨーロッパ・半島・日本—新しい「文化学」の

構築を目指して」(2010年3月1日)

○講演会

・「20世紀のミュージアム論」(2009年3月29日)

○紀要

・『19世紀学研究』第4号を発刊(2010年3月29日)

本年度は19世紀における神秘主義的潮流の研究プロジェクトと近代東アジア文化学プロジェクトを継続し、新たに「近代」の見直しの文脈において、人文社会科学分野で現在研究が進んでいる「ミュージアム論」研究プロジェクトを加えた。

1)「神秘主義と近代」シンポジウムの講演者及び概要は以下の通りである。

講演者：

- ・今野喜和人(仏文学・仏思想史専攻：静岡大学)「神秘主義者の見たフランス革命：サン・マルタンの『クロコディル』を中心に」
- ・大角欣矢(音楽史専攻：東京藝術大学)「ハルモニアの形而上学と啓蒙思想：18世紀から19世紀初頭のドイツ語圏における対位法をめぐる言説を中心に」
- ・坂本貴志(ドイツ文学・ドイツ思想史専攻：山口大学)「集合的記憶の生成：カントからフロイトへ」

概要：

学部プロジェクト「19世紀学研究」は、コア・ステーション Institute for the Study of the 19th Century Scholarship (以下、19世紀学研究所と略記)・19世紀学会と共同で、19世紀(フランス革命期から第一次世界大戦までの、いわゆる「長い19世紀」)における神秘主義思想(新プラトン主義、ヘルメス主義)を研究テーマの一つとしてきている。それは、ヨーロッパ文化には少なくとも二つの大きな流れがあるという認識に基づいている。ソクラテス以来の理性の伝統と並んでソクラテス以前の哲学者、ないしは新プラトン主義の伝統がヨーロッパ文化において脈々と現在まで流れている

という事実は、案外、知られておらず、また、神秘主義の研究は、往々にして非合理主義、いわゆる「神秘主義」として片付けられてしまいがちである。だが、18世紀以降のヨーロッパ文化を理解する上ではこの伝統を正しく理解しておくことが不可欠である。2007年5月に開催した国際シンポジウム「19世紀と神話学」はこのような考えに基づく。

その国際シンポジウムを受け継ぐ意味を持った本シンポジウムでは、フランス啓蒙主義における神秘主義思想を研究されている今野喜和人先生(静岡大学)、また2008年の国際シンポジウムでもお話しいただいた、音楽における神秘主義思想を研究の一つのテーマとされている大角欣矢先生(東京藝術大学)、また、2009年3月のシンポジウムでドイツ古典主義文学ゲーテ・シラーにおけるヘルメス主義についてお話くださった坂本貴志先生(山口大学)をお招きし、「啓蒙主義の時代における神秘主義思想－ヨーロッパ文化のもう一つの思想的潮流－」という共通論題で講演していただいた。

2)「近代とミュージアムの成立」シンポジウムの講演者及び概要は以下の通りである。

講演者：

種田 明(産業考古学：静岡文化芸術大学)「ミュージアムの成立と展開」

小田部胤久(美学：東京大学)「歴史家としてのヴァンケルマン：バロックと古典主義の交錯するところ」

岡本和子(W.ベンヤミン論：大東文化大学)「言語というアーカイヴ：ベンヤミンの「蒐集」をめぐる」

概要：

学部プロジェクト「19世紀学研究」は、19世紀学研究所と共同で、今年度新たに研究プロジェクトを開始した。それは「近代とミュージアムの成立」というプロジェクトである。19世紀学の再検討を行ってきた延長線上に、このプロジェクトは位置する。19世紀における学の成立と軌を一にして設立されたのが美術館、自然史博物館を初めとするミュージアムであ

る。ミュージアムの成立とともに、それ以前の「蒐集・コレクション」の構造が再編される。18世紀以前には、クンストカマー（「人工物陳列室」）、ヴンダーカマー（「驚異の部屋」）と言われる王侯貴族・聖職者の陳列室に蒐集物が展示されていた。その蒐集原理は、現在のものとは異質である。17世紀のある陳列室は、次のように分類されていたという。「人類の珍奇」「四足獣」「鳥類」「魚類と海の植虫類」「貝殻」と「その他の海のもの」「昆虫類と蛇類」「植物、その第一に木と根」「葉」「花」「ゴムとリキュール」「種子」「珍奇な果物」「その他の果物と種子」「鉱物、その第一に石」「石に変化したもの」「その他の鉱物」「古代遺物」「人工物」（クシットフ・ポミアン『コレクションー趣味と好奇心の歴史人類学』1987年、74頁）。こうした分類は、わたしたちが知っている近代的分類法とは明らかに異なり、この世界のすべての存在と物を蒐集しようとする欲望を表現しており、自然のものと人間の手になるもの（古代の彫刻、絵画、地球儀、観測器具等）を区別しないところにその特徴がある。このような陳列室は、18世紀、19世紀にかけて近代的ミュージアムに変貌し、専門分野別に様々なミュージアムが成立する。（美術館、自然史博物館、図書館、植物園、動物園等）。近代的ミュージアムとは、近代の知が可視化されたものに他ならない。他方20世紀に入ると近代的ミュージアムに対する批判の声が上がる。とりわけ1980年以降のクンストカマーやヴンダーカマーの再発見・再評価はこの連関抜きには考えられない。このように見るならば、18世紀前半と20世紀前半から後半にかけてミュージアムを巡って知の構造転換が生じていると言えるのではないか。そしてこの二つの転換点を押さえることによってミュージアムの時代である19世紀がより明確に輪郭づけられるのではないか。さらに、現代において19世紀ミュージアムは批判的になっているが、わたしたちはどれほどそれについて知っているのか。19世紀学研究が今まで明らかにしてきたのは、19世紀のもつ多様性であった。もしかしたらわたしたちは現代からの批判を修正する必要があるのではないか。そのような問題意識から本シンポジウム「近代とミュージアムの成立」を開催した。

3)「ヨーロッパ・半島・日本 -新しい「文化学」の構築を目指して」の講演者及び概要は以下の通りである。

講演者：

逸見クロエ（新潟大学）『『越後国柏崎弘知法印御伝記』 - 地方から日本の特質を探る』

染谷智幸（茨城キリスト教大学）「日本近世文学を東アジアから考える - 韓半島から東・南シナ海の海洋域を見渡しつつ」

高橋博巳（金城学院大学）「東アジアの半月弧 East Asian Crescent - 浪華・ソウル・北京・ハノイ -」

パスカル・グリオレ（パリ東洋語学校）「日本の大衆演劇 - 現在の旅芝居の魅力 -」

概要：

文化学をあらたに構築するために、いかなる視点がいま必要なのか。この問いに対する取り組みのひとつとして、19世紀以後に成立したナショナリズムの枠組みを超え、日本文化を多元的な世界システムの中に開く試みをおこなったのが本シンポジウムである。江戸期近世から現代文化に至るまで主題は多岐におよんだが、いずれの発表においても、東アジアやヨーロッパの諸文化と照らし合わせることによって、日本文化の異種混交性・脱領域性があますところなく強調されるものとなった。

○講演会

宮崎裕助（新潟大学）「20世紀ミュージアム論」

概要：

20世紀に入ると19世紀型ミュージアムの収集法とディスプレイ方法に対する疑念の聲が聞かれるようになる。Abi Warburg は既に1910年代後半より独自のミュージアム構想を抱いていた。第二次世界大戦後、批判はさらに強まる。この講演では、ドイツの哲学者 Th.W.アドルノのミュージアム論を手がかりに19世紀型ミュージアムの問題点とミュージアムの今後のあるべき姿について示唆が与えられた。

○コア・ステーション紀要『19世紀学研究』第4号

概要：

今号は、19世紀学研究所・19世紀学学会が中心となって行った2009年1月と3月のシンポジウムに基づく特集への寄稿論文ならびに投稿論文(内、2本は英文)から成る。